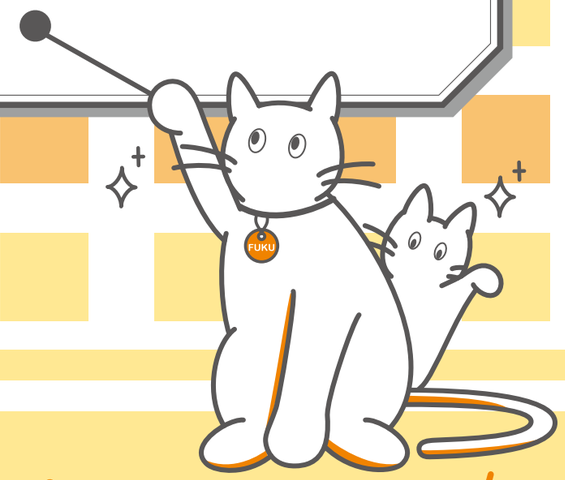
「保育士になりたい！」につなげる 保育実習受入れガイドブック



実施項目を確認できる
チェックリスト付き！

福岡県
Fukuoka Prefecture

【発行】福岡県　【発行年】2026年1月

保育実習は、実習生が保育の仕事に触れ、学び、
未来へ進む最初の一歩となる大切な機会です。
本ガイドブックでは、実習の流れや受入れ体制、指導のポイント、
養成校との連携など、充実した実習のための要点をまとめています。
Q＆Aやチェックリストとあわせてご活用いただくことで、
実習生が安心して学べる環境づくりに役立てていただけます。
実習を通して保育の魅力が伝わり、未来の仲間が増えることを願っています。

目次

保育実習概要 2

保育実習の考え方 / 実習指導者の役割とは / 履修について /
保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの内容について

受入れ体制の整備 7

実習受入れの流れ / 受入れの準備 / 実習生受入れ時の心得と配慮 /
コラム 実習担当者へのメッセージ（P.10）

保育実習の指導内容と指導方法 11

保育実習の指導とは / 保育実習指導の内容 / 保育実習指導の方法 /
よくある課題と改善のヒント
コラム 保育日誌の役割（P.16）
コラム オリエンテーションの大切さ（P.17）

養成校との関わり 18

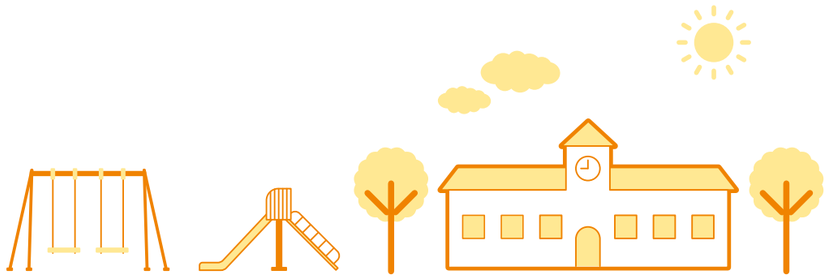
保育実習における施設と養成校の連携 / 養成校との連携についてのポイント
コラム 連携の具体的な事例（P.19）

事例紹介 20

わらしこ保育園（福岡県久留米市）/ 寺子屋まんぼう保育園（愛知県名古屋市）

現場の声から生まれたQ＆A 22

保育実習受入れのためのチェックリスト 28



保育実習の考え方

保育実習の指導は、事前指導・実習中の指導・事後指導という三つの段階から成り立っています。
事前と事後の指導は養成校が、実習中の指導は実習施設が主に担います。しかし、実習生にとってそれらは別々の学びではなく、ひとつの流れとして積み重なっていく経験です。学びが途切れず続いていくことで、保育者としての基礎が少しずつ形づくられていきます。

養成校では理論を学び、現場では実践を通してその理論を体感します。この理論と実践の往還こそが、保育者としての成長の礎です。授業で学んだ知識が、こどもたちとの関わりの中で生きた学びへと変わる瞬間、実習生は「保育の面白さ」を実感します。実習は、まさにその気づきを得るための大切な時間なのです。そして保育実習は、実習生が「保育者としての第一歩」を踏み出す場でもあります。不安を抱えながらも、こどもたちと向き合う中で芽生える責任感や喜び、失敗から得る学び、そのすべてが、これからのキャリアの原点となります。だからこそ、養成校と実習施設が思いを共有し、連携しながら実習生の成長を見守ることが何より大切です。

実習の主体は実習生です。指導者から見れば「教える対象」ではありますが、実習という時間の中では、自ら学びを見つけ、考え、行動する学びの主体として捉えることが求められます。
その姿勢は、将来こどもの主体性を尊重できる保育者を育てる土台になります。
そのためには、まず「実習生を理解しようとすること」。
対象を理解しなければ良い指導は成り立ちません。ときに価値観の違いから戸惑うこともあるかもしれませんが、背景や歩んできた経験に目を向け、世代を超えて理解しようとする姿勢が大切です。
養成校と実習施設が一人ひとりの実習生を共有しながら、その成長を支える協働の姿勢を持つことで、より豊かな学びの場が生まれます。

point

実習は保育者としてのキャリアの出発点を形づくる重要な機会

point

まずは実習生を理解しようとすること

point

養成校と実習施設が、実習生の姿を共有し、理解を深め合いながら協働して一人の保育者を育てていく視点を持つ

実習指導者の役割とは

実習指導者として、まず大切なのは「実習の目的やねらいを理解すること」です。
保育実習は、授業で学んだ知識や技能を実際の現場で生かし、保育の理論を実践に結びつける時間です。
こどもと関わり、保育者の姿を見て学ぶ中で、実習生は「保育とは何か」を身体で感じ取ります。

実習の目的や制度上の位置づけを理解したうえで重要なのは、指導者自身の関わり方です。
実習は実習生が知識を確認する場であると同時に、こどもや保育者との関わりを通して自らの学びを深める場です。
そのため、実習指導者には「実習生を一人の学び手として尊重すること」「こどもの姿を通して学びを支えること」が求められます。
また、実習生が安心して挑戦し、失敗を振り返り、次の一歩につなげられるように支えることも大切です。

point

保育実習の目的は、養成課程で習得した知識や技能をもとに、それらを総合的に実践へとつなげる応用力を養うこと。

実習指導者には、「実習生を一人の学び手として尊重すること」「こどもの姿を通して学びを深められるよう導くこと」が求められます。

その際に、実習生が安心して挑戦し、失敗を振り返り、次の一歩につなげられるように支えることも重要です。

※ 出典：保育実習実施基準第1「保育実習の目的」
（雇児発第1209001号 平成15年12月9日 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知
「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」）

履修について

保育実習は、次表の履修方法により行います。（保育実習実施基準第２抜粋）

実習種別	履修方法		実習施設
	単位数	おおむねの実習日数	
保育実習Ⅰ（必修科目）	４単位	20日	(A)
保育実習Ⅱ（選択必修科目）	２単位	10日	(B)
保育実習Ⅲ（選択必修科目）	２単位	10日	(C)

※保育実習Ⅲは保育所以外での施設実習となります。

(A) 保育所、幼保連携型認定こども園又は児童福祉法第６条の３第１０項の小規模保育事業（ただし、「家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準」（平成２６年厚生労働省令第６１号 ）第３章第２節に規定する小規模保育事業Ａ型及び同基準同章第３節に規定する小規模保育Ｂ型に限る）若しくは同条第１２項の事業所内保育事業であって同法第３４条の１５第１項の事業及び同法同条第２項の認可を受けたもの（以下「小規模保育Ａ・Ｂ型及び事業所内保育事業」という。）
及び乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所（生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る）、児童養護施設、児童心理治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
(B) 保育所又は幼保連携型認定こども園或いは小規模保育Ａ・Ｂ型及び事業所内保育事業
(C) 児童厚生施設又は児童発達支援センターその他社会福祉関係諸法令の規定に基づき設置されている施設であって保育実習を行う施設として適当と認められるもの
（保育所及び幼保連携型認定こども園並びに小規模保育Ａ・Ｂ型及び事業所内保育事業は除く。）

point

保育実習Ⅰとは
実習生が初めて現場に立ち、保育の流れやこどもの姿を“見る”ことを中心に学ぶ実習です。保育士としての意識やスキルはこれからの段階ですので、「こどもってこんなに面白い」「保育って楽しい」と感じられるよう、温かく声をかけ、質問しやすい環境を整えましょう。

保育実習 II とは
実際に保育の一部を担い、“やってみる”ことを通して学ぶ実習です。実習生は指導案を作成し、こどもとの関わりや活動の進行を実践します。責任実習なども行われるため、挑戦を支え、振り返りを丁寧に行うことが重要です。

保育実習ⅠとⅡの詳しい内容は次ページをご覧ください。

保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの内容について

保育実習Ⅰ　目標

- 保育所や児童福祉施設等の役割や機能を理解する。
- 子どもを観察し、関わる中で子どもへの理解を深める。
- 学んできた教科内容を踏まえ、子どもの保育や保護者支援について総合的に学ぶ。
- 保育の計画・観察・記録・自己評価の方法を理解する。
- 保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ。

保育実習Ⅰ　内容

1. 保育所の役割と機能

- 保育所における生活と一日の流れ
- 保育所保育指針の理解と、それに基づく保育の展開

＼実習生の声／
こどもがけんかをしたとき、先生が叱るのではなく受け止めていた姿が印象的でした。

2. 子ども理解

- 観察と記録を通した子どもの理解
- 子どもの発達過程についての理解
- 子どもへの援助や関わり方

3. 保育内容・保育環境

- 保育計画に基づく保育内容
- 子どもの発達に応じた保育の実践
- 子どもの生活や遊びを支える保育環境
- 子どもの健康と安全の確保

＼実習生の声／
教科書で学んだ内容が、実際の保育現場でどう生きているかを実感できました。

4. 保育の計画・観察・記録

- 全体的な計画や指導計画の理解と活用
- 記録をもとにした振り返りと自己評価

5. 専門職としての保育士の役割と職業倫理

- 保育士の業務内容の理解
- 職務間の役割分担や連携の大切さ
- 保育士に求められる職業倫理

＼実習生の声／
もっとこどもの発達や声かけについて学んで、次の実習で活かしたいです。

保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの内容について

保育実習Ⅱ　目標

- 保育所の役割や機能について、具体的な実践を通して理解を深める。
- 子どもの観察や関わりの視点を明確にし、保育の理解を深める。
- 既習の教科や「保育実習Ⅰ」での経験を踏まえ、子どもの保育および子育て支援について総合的に学ぶ。
- 保育の全体的な計画、実践、観察、記録、自己評価に実際に取り組み、その理解を深める。
- 保育士の業務内容や職業倫理について、実際の取り組みを通して理解を深める。
- 保育士としての自己の課題を明確にする。

保育実習Ⅱ　内容

1. 保育所の役割や機能の具体的展開

- 養護と教育が一体となって行われる保育
- 保育所の社会的役割と責任

＼実習生の声／

予想通りにいかないことも多かったですが、そのたびに先生方に相談し、修正していく過程がとても学びになりました。

2. 観察に基づく保育理解

- 子どもの心身の状態や活動の観察
- 保育士等の動きや実践の観察
- 保育所における生活の流れや展開の把握

3. 子どもの保育および保護者・家庭への支援と地域社会との連携

- 環境を通して行う保育、生活や遊びを通した総合的な保育の理解
- 入所している子どもの保護者支援、ならびに地域の子育て家庭への支援
- 地域社会との連携

＼実習生の声／

実習を通して、保育士として働くイメージがより具体的に持てるようになりました。

4. 指導計画の作成・実践・観察・記録・評価

- 全体的な計画に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価を通じた保育過程の理解
- 作成した指導計画に基づく保育実践とその評価

5. 保育士の業務と職業倫理

- 多様な保育の展開における保育士の業務内容
- 多様な保育の展開における保育士の職業倫理

＼実習生の声／

実習の振り返りで、自分の言葉づかいや立ち位置など、細かい点を丁寧に指導してもらいました。

6. 自己の課題の明確化

- 実習を通して自らの課題を明確にし、今後の学びや実践に生かす。

参考文献
・『保育実習指導マニュアル』（一般社団法人全国保育士養成協議会、令和５年度）
・『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』（厚生労働省）

実習受入れの流れ

実習生の受入れは、園全体で共通理解を持って進めることが大切です。
以下の流れを確認し、円滑に実施できるように準備を整えておきましょう。

1. 実習申込の受理

- 本人、教育委員会、養成校などから実習申込の連絡を受ける。

point　実習は最初の出会いから始まります。実習生の思いや目的を丁寧に受け止めることを大切にします。

2. 受入れ可否の判断

- 施設長が受入れの可否を判断し、その結果を本人および養成校へ伝える。

point　園の状況や保育内容を踏まえ、無理のない形で受入れができるよう、職員間で共有して判断します。

3. 内諾書の送付

- 養成校等から送られてくる内諾書を施設より返送する。

point　養成校との信頼関係を築く第一歩として、迅速かつ誠実な対応を心がけます。

4. 受入れ決定

- 実習生の受入れを正式に決定する。

point　園全体で共通理解をもち、実習生を温かく迎える準備を整えます。

5. 事前指導の日程調整

- 実習生や養成校と、事前指導（オリエンテーション）の日程を調整する。

point　実習が安心して始められるよう、実習生・養成校・園の三者で丁寧にすり合わせを行います。

6. 事前指導（オリエンテーション）

- 指導及び遵守事項の確認
- 指導担当者の決定

point　園の理念や約束事を伝えながら、実習生が主体的に学べる雰囲気づくりを大切にします。

7. 実習の開始

- 実習中の指導（主に指導担当者が行う）
- 実習記録の点検・指導

point　実践の中で気づいたことを共有し、指導者と共にふりかえる時間を設けます。

8. 実習の終了

- 実習評価（指導担当者が実施）
- 最終評価（施設長、指導担当者、保育者で実施）

point　評価は「できた・できない」ではなく、学びの軌跡をともに振り返る機会とします。

受入れの準備

受入れ体制の整備

実習担当者（責任者・指導者）を明確にする

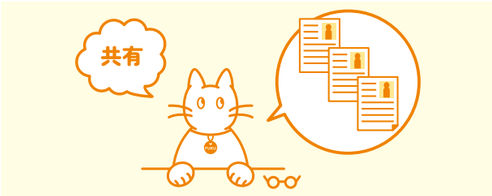
園長や主任が全体を統括し、
各クラスに１名の指導担当者を配置します。
実習生が「誰に相談すればいいか」が明確になることで安心して学べます。

職員全体で受入れ方針を共有する

「実習生は園の仲間として迎える」
「失敗も成長の一歩として支援する」など、
園全体で実習へのスタンスを共有しておきます。

情報共有の仕組みをつくる

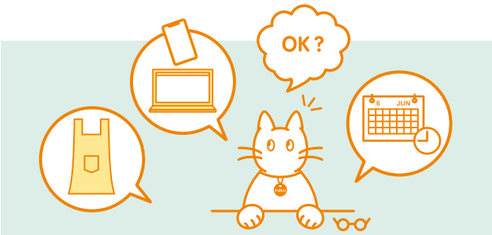
実習生のプロフィールや実習目標、配慮事項（体調・障害・宗教的配慮など）を職員会議で共有します。日誌の確認や助言の流れも事前に決めておくとスムーズです。



実習前の準備

実習スケジュール・マニュアルの整備

１日の流れや服装、持ち物、日誌の提出方法などをまとめた「実習ガイド」を用意します。
実習生も安心して実習に臨むことができます。



養成校との連携

事前打合せで、実習生の目標や課題を共有します。
必要に応じて実習中も連絡を取り合い、柔軟に対応します。

受入れ環境の整備

更衣室や荷物置き場、日誌記入スペースを確保します。
実習生の動線を確認し、こどもとの関わりがしやすい環境を整えます。

指導者側の基本

・実習生ごとに指導担当者を設け、担当者を中心に実習指導を行う。
・指導担当者は実習計画やルールを設定し、本ガイドブックを活用して効果的に実施する。
・実習時間は通常の保育時間内とし、無理のない範囲で設定する。
・行事等で延長変更がある場合は事前に実習生・養成校と調整する。
・休日保育の参加は、実習生本人の希望がある場合に限り実施可能。
・実習に必要な実費（昼食代・遠足交通費・材料費など）は事前に周知する。
・実習謝礼以外の金品は受け取らない。

実習生の遵守事項

・実習期間中に知り得た個人情報は、実習終了後も含めて絶対に漏らさない。
・挨拶・言葉遣い・態度・服装など、節度と礼儀をわきまえる。
・こどもの安全のため、アクセサリー類（指輪・ネックレス・ピアス等）は着用しない。
・実習時間・会合時間を厳守し、欠席・遅刻・早退の際は必ず事前に施設長または指導担当者に連絡し承諾を得る。
・実習中に関わるこども・保護者・保育者等と、実習の範囲を超えた個人的関係を持たない。

実習生受入れ時の心得と配慮

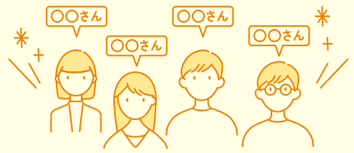
実習は、実習生にとって将来の進路を決定づける大きなターニングポイントです。
受け入れる側が、保育士のやりがいや専門性、そして保育の素晴らしさを伝えられるよう意識しましょう。

1 実習生受入れの意義を考える

■ 実習の指導には労力や負担も伴いますが、後継の人材を育てることは私たちの大切な使命です。
■ 消極的な姿勢は実習生にすぐ伝わってしまいます。積極的に迎え入れる姿勢を持ちましょう。
■ 受入れの意義や姿勢は、まず職員全体で共有・話し合うことが大切です。

2 実習生の名前を覚え、個性を認める

■ こどもと同じように、実習生にも個性があります。
■ 良い点を見つけたら、ぜひ声に出して伝えましょう。
■ 職員全員で、温かく見守り、励ます姿勢を心がけましょう。



3 委縮させないようにする

■「失敗しても大丈夫」と安心できる言葉がけをしましょう。
■ 厳しい叱責や威圧的な指導は、挑戦する気持ちを奪ってしまいます。
■ 質問しやすい雰囲気づくりが大切です。

4 失敗を責めず、学びに変える

■ 実習生が失敗するのは当然のことです。
■「どうすればよかったか」を一緒に考えることで成長の糧となります。
■ 注意が必要な場合も、人前で感情的に叱責することは避けましょう。

5 自分自身の実習時代を思い出す

■ 自分が実習生のときに嫌だったことを繰り返さないようにしましょう。
■ 威圧的な指導や根拠のない慣例に流されないよう心がけましょう。
■ 実習生に寄り添う姿勢を忘れずに。

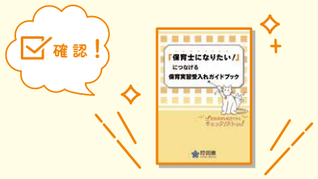
6 保育士としての誇りを示す

- 実習生にとっての「保育士像」は、私たちそのものです。
- ネガティブな姿勢ではなく、やりがいや誇りを示しましょう。
- 乗り越えた経験や成功体験を語り、夢を応援する存在になりましょう。

7 実習生からも学ぶ姿勢を持つ

- 実習生の教材や遊びから学べることもたくさんあります。
- 「教えて」と聞くことで自らの学びにもつながり、実習生との交流も深まります。

8 心得をチェックする



- 受入れ側・指導者としての心得をチェックし合うことで、実習をより実りあるものにできます。
- 本ガイドブックを活用し、職員間で確認しましょう。

実習担当者へのメッセージ

「実習生が来る」と聞くと、正直なところ、少しそわそわするかもしれません。
忙しいなかで余裕を持てるだろうか、ちゃんと伝えられるだろうか、 と。
でも実習が始まると、思いがけない「光」が差し込むことがあります。
環境の工夫に実習生が気づいてくれたとき、「あ、見てくれたんだ」と少しうれしくなる。
当たり前になってしまった日常の風景を、誰かが新鮮な目で拾い上げてくれることは、保育者にとっても励ましになる。
安全面での疑問をぶつけられ、ドキッとすることもある。慣れ切った環境の中で、見逃していた危険が確かにあったかもしれないと気づかされる。その瞬間、実習生が “教えてくれる側” にまわることだってある。

そして、私たちはよく言う。「失敗してもいいから、やってみてね」と。
でもその言葉は、実は自分たちにも返ってくる。

失敗を恐れず挑戦している姿を見せられているか。
失敗を責めるのではなく、許し合い、学び合うチームで本当にいられているか。
実習生の前に立つと、そんな自分たちの姿勢がそっと照らし出される。
だれかが学ぶ姿に触れるとき、私たちもまた学び直す。
実習とは、その静かな循環の中にある特別な時間なのだと思います。

保育実習の指導とは

保育実習は、学んだ理論を現場で確かめ、保育者としての基礎を築く大切な学びの場です。
読み聞かせやピアノのような技術も必要ですが、それ以上に、こどもの内面に寄り添い、言葉かけや関わり方を工夫する姿勢が求められます。

実習指導とは、実習生に “できていない点” を指摘することではなく、“気づきや学び” を導く支援です。
実習生の視点に立ち、丁寧に言葉をかけ、実践を振り返る機会をつくることで、学びが深まります。
また、保育者自身が自らの保育を見直し、伝える力を磨く貴重な機会でもあります。

一方で、実習後に保育職を選ばなかった実習生の４割が「自信を失った」と答えた調査結果もあり、
実習の雰囲気や指導の質が進路に影響していることが分かります。

こうした現状を踏まえ、実習生が安心して学べる実習環境を整え、こども理解・保育者理解・自己理解を深める指導を 、園全体で支えていくことが大切です。

point

保育実習の指導に求められる基本姿勢

1. 伴走型の支援　実習生の挑戦を見守り、成功体験と小さな学びを積み重ねられるよう支える。

▼

「失敗しても大丈夫、次に活かせばいい」という安心感を与える。

2. 一貫性のある指導　園全体で共通理解を持ち、実習生に矛盾や混乱を与えない。

▼

ルールや援助の仕方を統一し、実習生が迷わず学べる環境を作る。

3. 対話を通じた気づき　「正解を与える」のではなく、「問いを投げかける」ことで考える力を育てる。

▼

実習生自身が視点を見つけ、答えを導き出す経験を大切にする。

保育実習指導の内容

保育実習では、実習生がこどもや保育者との関わりを通して、保育の意義や専門性を学びます。
ここでは、保育実習指導の基本的な考え方と、各段階での指導のポイントを、**具体例**を交えて紹介します。

1 基本的な考え方

保育実習の軸となるのは以下 **3点** です。

子ども理解 **こどもの行動の背景や発達のプロセスを読み取る視点を育てる**

例　「泣いている子」を単に「機嫌が悪い」とせず、生活リズムや人間関係、感情表現の未発達など多角的に考える。

保育者理解 **保育士の言葉かけや援助の意図、チームでの連携を観察し、専門性を学ぶ**

例　「声をかけるタイミング」や「安全配慮の優先度」をどう判断しているかを知る。

自己理解 **自分の関わり方を振り返り、次にどう行動するかを考える力を育む**

例　「こどもに近づいたときに笑顔になった／逆に緊張した」など、自分の影響を自覚する。

2 観察実習

実習の第一歩は **「観る」** ことです。
「こどもの内面をどう想像できるか」「保育士の援助をどう解釈できるか」が問われます。

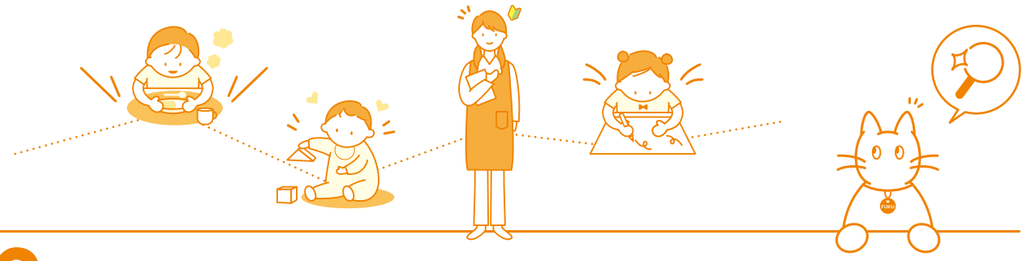
こどもの生活や遊びを観察し、表情・姿勢・関わりの中から心の動きを捉える

保育士の言葉かけや環境構成、安全配慮の工夫を観察する

「なぜ今、声をかけたのか」「なぜあえて声をかけなかったのか」を考える

問いかけ例　「この子はどんな気持ちで遊んでいると思う？」
「保育士の一言でこどもの表情が変わったね、どうしてだろう？」

point　観察実習は、こどもの主体性や権利を理解する第一歩です。
実習担当者が具体的な問いを投げかけることで、実習生の **“観る目”** はぐっと育ちます。



3 実践実習

観察から学んだことを土台に、実際にこどもと関わる段階です。初めは短時間・小集団での援助から始め、実習生が安心して挑戦できる場を整えることが重要です。

声のかけ方や距離感を試し、こどもの反応を感じ取る

食事や着替えなど日常生活の援助を経験する

保育士が「きっかけ」をつくり、実習生が自然に関われるよう支援する

具体例　食事の際に隣に座り、こどものペースを尊重して援助する。
遊びに一緒に入り、こどもの興味を広げる。
着替えのときに「自分でやってみる？」と声をかけ、自立を促す。

point　実習生が **「やってみてうまくいかない」経験をすること** も重要です。
保育士はその失敗を安全にフォローし、学びへと変える視点を持つ必要があります。

4 部分実習・責任実習

実習の後半では、活動や一日の流れを見通して **計画・実践・振り返り** を担います。
これは実習生にとって最も大きな挑戦であり、保育の専門性を体験的に理解する場です。

計画の立案 **ねらい・内容・準備・安全配慮を事前に整理する**

実践の実施 **こどもの反応に合わせて柔軟に対応する**

振り返り **記録をもとに「よかった点・改善点・次に活かす工夫」を明確にする**

総合的な意識 **こども・保育者・環境・保護者との関わりを統合的に考える**

振り返りの視点例　「こどもはどう反応したか」
「自分はどんな援助をしたか」
「保育士や仲間とどう連携できたか」

point　責任実習を通して、実習生は **「こどもの主体性を守りながら保育をデザインする」** 経験を積みます。
園は実習生の力量を尊重しつつ、無理のない範囲で段階的に任せることが大切です。
オリエンテーションの時に実施することを伝え、実習生が事前に準備できるようにしましょう。

保育実習指導の方法

保育実習の指導は、実習生が安心して学びを深められるよう、園全体で支え合いながら進めていくことが大切です。ここでは、具体的な指導の進め方や、実習生の個性や特性に応じた関わり方、振り返りや記録を活用した学びの支援方法について紹介します。

1 具体的な指導の方法

1 問いかけの工夫

- 「どうしたらいい？」ではなく「どう考えた？」と尋ねる
- 出来事を一緒に振り返り、「こどもの気持ちをどう想像した？」と聞く
- 答えを導くよりも「考え続ける力」を育むことを重視する

実習生は「何をすれば正解か」を求めがちですが、
問いを通して「なぜそう考えたか」を言語化させることが重要です。

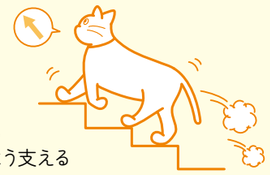
2 モデルを示す

- 保育士が実際にこどもへ声をかけ、その理由を解説する
- 「今は遊びを中断しないほうがいいと思った」「安全を優先した」など思考過程を共有する
- プロの判断基準を「見せて」「言葉にする」ことで専門性が伝わる

実習生は「見て学ぶ」ことが多いため、
保育士が意図をもって行動を示すことが効果的です。

3 ステップアップの支援

- 初めは短時間・小集団の援助から始める
- 計画を一緒に確認し、当日はそばで見守る
- 実践後には「一つだけ改善点」を具体的に伝える
- 部分実習から責任実習へ、無理なく移行できるよう支える



実習は段階を踏んで役割を広げることが基本です。

4 フィードバックの仕方

- 即時フィードバック── こどもとのやり取り直後に「今の声かけで笑顔になっていたね」と具体的に伝える
- 一日の振り返り ── 短時間でも「できたこと・改善点・次の目標」を整理する
- 言葉選び──── 「できていない」より「次はこう工夫すると良い」と前向きに伝える

実習生にとって最も印象に残るのは、指導者からの言葉です。
表現の仕方次第で自信にも不安にもなります。

2 園全体で取り組む指導

1 指導方針の共有

- 実習担当者だけでなく、全職員が「実習前を仲間として受け入れる」姿勢を持つ
- 園内掲示や打ち合わせで、実習の目的やルールを全員で確認する

2 一貫性の確保

- 「メモを取ってよい／いけない」など細かい点で差が出ないように統一する
- マニュアルや会議を通じて共通ルールを明確化する

3 チームでのフォロー

- 担当者が不在の時間も、他の職員がフォローできる体制を整える
- 実習生が「誰に聞いても答えが返ってくる」状態を保証する

3 実習生の多様性に応じた指導

1 世代の特徴を踏まえる

近年の実習生の特徴

- ネガティブな指摘に弱く、自己肯定感が下がりやすい
- 「意味や背景の理解」を重視し、反復練習だけでは学びにくい
- 写真・動画などのデジタル記録で学ぶことに慣れている

→ 指導者は一方的な注意を避け、対話や視覚的ツールを活用すると効果的です。

2 個別性の尊重

- 実習生ごとに得意・不得意や経験値が異なる
- 全員に同じ課題を課すのではなく、「次の一歩」を個別に設定する
- 「昨日より成長できたか」を基準に評価する

4 振り返りと記録の活用

1 実習日誌の活かし方

- 事実の羅列で終わらせず、「こども理解・保育者理解・自己理解」を意識させる
- 指導者はコメント欄で視点を広げる問いを投げかける

2 ICTの活用

- 写真や動画を日誌に添えると、実習生の振り返りが具体化する
- 共有ツールを使えば、養成校・園・実習生の三者で学びを深められる

よくある課題と改善のヒント

情報共有不足

現場

説明不足や職員間でのばらつきにより、実習生が「何をすればいいかわからない」と戸惑う。

実習生の受け止め

「自分は歓迎されていないのでは」と不安になり、挑戦よりも「失敗を避ける」意識が強まる。

改善

実習生用資料を標準化し、園内掲示やチェックリストで誰でも同じ説明ができるようにする。

指導対応の不一致

現場

職員ごとに「メモを取っていい／ダメ」など対応が異なる。

実習生の受け止め

「現場はバラバラ」という誤解を持ち、意欲をなくす。

改善

園内マニュアルを整備し、実習前に共通理解を形成。矛盾が出た場合は「園としての公式見解」を示す。

実習生への負担感

現場

忙しさから「余計な仕事」と受け止めがち。

実習生の受け止め

「自分は邪魔な存在」と感じ、質問や挑戦を避ける。

改善

実習生に小さな役割を設定し、「いてくれて助かった」と実感できる場をつくる。若手職員が一緒に学ぶ姿勢を持つと園全体の学びにつながる。

誤学習のリスク

現場

保護者対応がフランクに見える、厳しい安全指導だけが目立つ。

実習生の受け止め

表面的な行動を「正解」と誤解し、養成校で学んだ内容と矛盾を抱える。

改善

対応の背景や意図を言葉で解説する。
「信頼関係があるからフランクに話せるが、基本は丁寧な対応」などと補足する。

保育日誌の役割

現在の保育日誌は、単なる「記録」という役割から、「職員間でリアルタイムに共有し、保育の質を高めるための対話のツール」へと、その目的が大きく変化しています。こうした変化を支えているのが、ICTの活用です。
紙ベースの日誌が抱えていた「時間差」や「情報量の限界」といった課題を克服し、写真や動画を添付することで、文字だけでは伝わりにくい臨場感を共有できるようになりました。
これにより、記録に費やす時間を短縮し、重要な気づきをチーム全体でタイムリーに共有することが可能になっています。
今後は、実習の場でもICTを活用した記録が広がっていくことが予想されます。
しかし何より大切なのは、保育実習記録が「省察（リフレクション）」のための手段であるという視点です。
実習生が保育現場で見聞きした出来事を自分の言葉で捉え、こどもの姿・環境・保育者の関わりを結びつけて考えることで、学びが深まります。
指導者は、実習生の記録から「どのような学びが生まれようとしているのか」を読み取り、次の実践へとつなげる支援が求められます。

忙しさによる指導不足

現場

行事や欠員で振り返りの時間が取れない。

実習生の受け止め

「見てもらえていない」と感じ、不安や消化不良が残る。

改善

即時フィードバックを30秒でも行い、1日の終わりに5分の振り返りを必ず設ける。
ICTやメモを活用して短時間でも交流する。

指導時間が確保できない

問題

行事や欠員対応で振り返りの時間が不足。

対応

即時フィードバックを30秒でも行うこと、口頭での一言フィードバックや付箋でのメッセージ、次回につながる小さな目標提示など、“途切れない関わり”を意識することで、実習生の学びを継続的に支えられます。

実習生が受け身になる

問題

「言われたことだけやる」にとどまり主体性が育たない。

対応

問いかけで考えを引き出し、意見を言語化させる。
実習で実習生が受け身な場合は、まず安心して動ける雰囲気づくりが大切です。
その上で「次はどうしたい？」「こどもの様子をどう感じた？」と問いかけ、考える機会を増やします。
できたことを具体的に認め、小さな成功体験を積ませることで主体性が芽生えます。

現場が「実習は負担」と感じる

問題

実習生指導が「仕事の増加」と捉えられる。

対応

実習は園にとっても学びの機会です。若手職員には「教えることで学ぶ」経験を促し、指導後に短い振り返り時間を設けて気づきを共有します。こどもへの関わりを見直すテーマを週ごとに設定し、チームで話し合うことで、実習を“共に育つ場”へと変え、園全体の保育力向上につなげます。

オリエンテーションの大切さ

実習生が初めて園の門をくぐる朝。ぎこちないスーツと、胸に抱えた緊張。その緊張を「がんばりの証」として、そっと受けとめたいと思っています。はじめての場所で呼吸が浅くなるのは、だれにでも起こる自然なことだからです。
だからこそ、オリエンテーションはただ説明を並べる時間ではなく、実習生の心が少しあたたまるような、やわらかな入口にしたい。
園内をゆっくり歩きながら、今日の匂い、こどもたちの声、そして保育者たちのいつものまなざしを紹介する。
言葉以上に、園をつくっている空気そのものを感じてもらいたいからです。職員をひとりずつ紹介しながら、「ここには、あなたを支える人がちゃんといます」という安心を伝える。こどもたちと少し触れ合っただけで、実習生の肩の力がふっと抜けていくと、「ああ、ここから始まるんだな」とこちらまでうれしくなります。
そんな始まりがあるだけで、実習の日々はきっとほぐれながらひらいていく。
オリエンテーションとは、その“はじまりの流れ”をつくる大切な一歩なのだと思っています。

1. 大谷 彰子・平化 恵美子（2012）. 保育者養成課程における実習に対する課題と不安の変容 .『甲子園短期大学紀要』30,6773.
2. 全国保育士養成協議会編（2018）.『保育実習指導のミニマムスタンダード：「協働」する保育士養成 ver.2 』. 中央法規出版.
3. 下木 猛史（2022）. 保育の人材確保を阻むもの ——実習後のアンケート調査からみえてきたこと——.『豊岡短期大学論集』18,209216.
4. 一般社団法人全国保育士養成協議会（2024）.『保育実習指導おける連携・協働の方法』（令和5年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書）.

保育実習における施設と養成校の連携

実習の成功は、施設と養成校が同じ目線で学生を支えることから生まれます。
実習の前・中・後、それぞれの場面での連携を丁寧に行うことで、学生の学びと自信につながります。

実習前

- **実習段階・内容の確認** ― 保育実習Ⅰか Ⅱか、依頼文書・計画書で把握
- **養成校での事前学習を理解** ― 保育実習指導の学び / 授業公開・講話の活用
- **職員間で情報共有** ― 受入れの意義・実習内容を全員で確認
- **オリエンテーション実施** ― 園理念・保育内容の説明 / 実習計画を一緒に作成
- **職員間で情報共有** ― 受入れの意義・実習内容を全員で確認

実習中

- **実習生と対話・理解** ― 緊張を和らげ安心できる環境づくり
- **記録・責任実習の調整** ― 日誌様式 / ICT活用ルールを養成校と確認
- **養成校教員の訪問指導** ― 日誌の見方・責任実習の進め方を共通理解
- **実習生の課題は早めに養成校へ相談** ― 実習生指導は、園だけで抱え込まない

実習後

- **実習評価の作成・共有** ― 良い点と課題を具体的に言葉で記載
- **養成校にフィードバック** ― 評価内容を伝え、今後の指導へつなげる
- **養成校の事後指導に関心を寄せる** ― 報告会・懇談会へ参加 / 報告書を確認
- **実習生の学びを次のステップへ** ― 養成校の指導を理解し、さらなる連携へ ―― 実習生の学びを広げ、つなげていく

養成校との連携についてのポイント

point 1 実習生の実習段階・内容を確認する

実習生を受け入れる際は、養成校からの依頼内容「実習段階・内容」を確認しましょう。
「保育実習Ⅰ」と「保育実習Ⅱ」では内容が異なります。
送付される実習計画書や手引きをもとに、事前に把握しておきましょう。
各養成校は「指定保育士養成施設指定基準」を基本としつつ、独自のカリキュラムを編成しています。
見学や体験を事前に取り入れている養成校もあるため、情報交換を通して理解を深めましょう。

point 2 実習前に養成校で学んでいることを把握する

実習生は「保育実習指導」という授業の中で、実習の意義や目的、段階と内容、保育所理解、記録、心構えなどを学んでいます。授業公開や講師派遣などの取り組みも進んでいるため、機会があれば授業を見学したり、連携を深めると良いでしょう。

point 3 実習オリエンテーションで養成校との接点を活かす

実習生は事前に目標を立てて臨んでいます。その思いを聞き取りながら、園での体験と結びつけていくことが大切です。養成校での学びを踏まえ、園と養成校が一体となってオリエンテーションを充実させましょう。

point 4 ICT活用についての協議

近年は実習日誌などの記録にICTを導入する園も増えています。養成校とあらかじめルールを確認し、フォーマットや活用方法を共有しておくとスムーズです。

point 5 養成校教員の訪問指導を大切にする

訪問指導は、養成校と園が実習生の学びを共有できる重要な機会です。日誌や部分・責任実習の進め方など、双方で共通理解を図りましょう。実習生の普段の様子を養成校に伝えることで、事後の指導にも活かされます。

point 6 実習後の養成校とのつながり

養成校では、実習後に振り返りや評価を通して学びを整理します。園としても評価内容を具体的に伝え、養成校と共有することが大切です。機会があれば養成校での事後指導や懇談会に参加し、次の実習につなげましょう。

連携の具体的な事例

事例 1　実習後の「フィードバック共有会」

養成校が実習後に、実習生全員の振り返りの内容（指導で感動した点や難しかった点等）を共有する場を設けることがあります。
普段聞けない学生の率直な意見をもとに、指導の「伝わりやすさ」や「効果」を客観的に評価でき、次期実習の受入れ態勢改善に活かせる機会となりますので、このような共有会が実施される場合は可能な限り積極的に参加しましょう。

事例 2　養成校がファシリテートする「課題協議会」

養成校が仲介役（ファシリテーター）となり、複数の保育園と大学の教員が集まり、実習中の具体的な悩みや課題（例：実習生の主体性の引き出し方、記録の書き方）について意見交換を行う場です。この場を通じて、園の垣根を越えた指導方法の情報共有ができるほか、養成校の教員と連携を深めることで、採用に向けた事前のアプローチにも繋がります。

養成校との連携には、様々な形がありますが、受け身ではなく「関わる姿勢」で臨むことが重要です。養成校からの案内があった際は積極的に参加し、園の指導をアップデートし、未来の保育士像について熱い意見を伝えてください。
その一歩が、貴園の未来の採用力と保育の質を大きく向上させます。

保育現場の工夫と学び 事例紹介①

実習生を受け入れる現場では、より良い実習のために、どのような工夫が行われているのでしょうか。
ここでは、日々の中での工夫や、実習生との関わり方のヒントを、実際の事例から紹介します。

実習受入れは未来への投資！ 心から保育を楽しむ姿を見せています

福岡県久留米市
社会福祉法人宮本福祉会
わらしこ保育園

取組のきっかけ

「今日１日いたけど、何をすればいいのか全然分からなかったよねー。」
ある日の実習生同士の会話が、すべての始まりでした。実習生はクラスに配置されたものの、指導や声かけがほとんどなく、戸惑ったまま１日を終えていたのです。「将来の同僚や保育業界を支える若者たちに対して、このままではいけない」と危機感を抱き、実習受入れ全体を見直しました。

実施していること・工夫していること

1 現場と協働したマニュアルづくり

指導者の困りごとを拾い、現場と一緒に改善したマニュアルを作成。
職員の迷いが減り、実習生が学びやすい環境を整えています。

実習の内容や豊富な資料が確認できる「**保育実習の手引き**」。
定期的に内容を見直し、刷新しています。

2 “再現できる” 実習日誌

日誌は記録ではなく保育の “レシピ”。絵本や声かけを具体的に書き取り整理します。
達成しやすい目標で小さな成功を積ませ、理解と自信を育てています。

3 観察で広げる視点

最初の３日間は徹底した観察、以降は立ち位置や動きなど見るポイントを明確化。
実習生は保育の細部に気づきやすく、指示も出しやすくなります。

4 指導担当者の明確化

各クラスに相談先を明確化。支援が一貫し、質問もしやすい環境に。
１年目職員が担当することもあり、指導が職員の成長にもつながっています。

5 実習生チェックリスト

あいさつ・報告・５分前行動など 前提となる社会人マナー等を
事前にチェックリストで共有。双方が気持ちよく過ごせる
実習環境を整えています。

チェックリストの項目例
- ☐ 爪は切り、髪は結び、服装に乱れや汚れがなく、実習に適切な化粧ですか？
- ☐ 相手の顔を見て挨拶ができていますか？
- ☐ 大変かもしれませんが、いつも笑顔でいようと心がけていますか？

学びのヒント

現場と共につくる仕組みづくり
マニュアルやルールは “上から” ではなく、“現場の声” と共に更新することで、指導の迷いを減らし、全員が納得して動ける環境をつくります 。

観察から始める学びの設計
最初の数日は徹底して観察に集中させ、見るべき視点を明確にすることで、実習生が「保育を見て学ぶ力」を育てます。

社会人マナーはチェックリストで
保育実習をするうえで身につけていてもらいたい事柄は、チェックリストで確認。
個別に注意したり、注意されたりの煩わしさが無くなります。

保育現場の工夫と学び 事例紹介②

さまざまなバックグラウンドの実習生を受け入れ、安心して学べる場を提供

愛知県名古屋市
社会福祉法人ほうりん福祉会
寺子屋まんぼう保育園

取組のきっかけ

「当園では近年、身体・発達・視覚・聴覚など、多様な障害のある学生の実習受入れが増えています。
責任実習の進め方や支援方法に難しさもありますが、養成校と情報共有しながら、受入れ体制や指導方法を丁寧に検討しています。実習生一人ひとりの特性を理解し、安心して実習に臨める環境づくりを大切にしています。
今後も多様な実習生を受け入れることが想定されるため、園と養成校が連携し、柔軟な支援体制の整備を進めていきたいと考えています。

実施していること・工夫していること

1 実習カリキュラムの設定

段階的に学びを深め、こどもの理解と環境把握をつなげる、
２週間の実習カリキュラムを園として用意しています。

乳児遊びの「生活と遊びの環境のフォトマップ」。
気づいたことを写真と文章で記録します。

例：１週目ー乳児保育　２週目ー幼児保育

保育実習Ⅰ　最初の３日間は「デイリー記録」を作成。木曜・金曜には「生活と遊びの環境のフォトマップ」を仕上げる。

保育実習Ⅱ　上記に加えて「コーナー保育の記録」や「特定のこどもに視点を置いた成長ストーリー」を作成する。

2 実習記録の位置づけ

実習記録は、次の３点を大切にしています。実習生を「職員の仲間」として扱い、
記録や労働条件も含め、実習を現場に即したものにしています。

- **記録は実習時間内に作成することを徹底。**
- **休憩時間も設け、夕方15時には記録を終えるよう指導。**
- **その日の担任と振り返りを実施し、学びを整理して次につなげる。**

作成したフォトマップを確認しながら、
振り返りをおこないます。

3 オリエンテーションの工夫

半日をオリエンテーションに充てていますが、形式的な説明会ではなく実際に保育に入ってもらう形を取っています。実習生は、最初は緊張するため、半日一緒に保育に関わることで緊張が和らぎ、スタートがスムーズになり、安心して学びを始めることができます。

学びのヒント

- 実習生を一人の仲間として迎え入れる姿勢が、実習の質を大きく左右します。
- 記録やカリキュラムを段階的に設定することで、実習生は無理なく学びを深めていくことができます。
- 障害を持つ実習生の受入れは難しさもありますが、養成校との協働により双方にとって学びの場となります。
- 「緊張を和らげる仕掛け」を工夫することは、実習生の第一歩を支え、園全体の温かい空気づくりにもつながります。

現場の声から生まれたQ＆A

実習生の受入れにあたって、現場ではさまざまな悩みや疑問が生まれます 。ここでは、福岡県内の保育施設から実際に届いた質問をもとに、実習指導や実習生との関わり方などについてQ＆A形式でまとめました。日々の受入れの参考に、ぜひお役立てください。

「保育実習制度や保育実習全般」

Q 01

実習生を受け入れるにあたり、保育士が日常的な保育に追われて十分に実習生の対応ができていないと感じます。保育士の環境を改善する必要性はあるかと思いますが、何からはじめればよいのでしょうか。

A まず、園として実習生受入れのためのマニュアルを整備することが必要です。
次に、実習担当者を決定し、園長や主任との打ち合わせを行うことで、実習準備や対応にかかる時間を短縮できると考えられます。**実習期間中は書類・会議を減らし、実習生対応の時間を勤務表に組み込むことや、指導者向けの短時間研修を行い、実習生への声かけやふりかえり方法を学ぶことも有効**です。いずれにしても、園全体で「実習生の指導も大切な保育の一部である」という意識を共有し、高めていくことが大切です。

Q 02

保育実習Ⅱでは大きいクラスで2時間程の計画で実践をお願いしていますが、1日の責任実習に踏み込めません。

A すべての園で必ずしも1日の責任実習を実施しているわけではありません。実習内容については、**園の保育方針や保育内容、養成校での指導内容と照らし合わせながら、柔軟に取り組むこと**が望まれます。責任実習の具体的な内容は園が一方的に指定するものではなく、実習生の学びたい内容を尊重しつつ、養成校と連携・相談の上で決定していくようにします。

Q 03

長期の実習の場合、設定保育をいつするのかなど、どのような流れで実習を組むのがよいのでしょうか。

A オリエンテーションの際には、これまでの実習での経験や実習生が学びたい内容を確認しながら、実習の進め方を検討します。また、園として実習を通してどのような学びを得てほしいかという視点も持ち、実習生の希望のみでなく、園としての方針を踏まえた計画を立てていくことが望まれます。基本的には、**観察から始めて段階的に経験を広げる流れが理想です。**初めの1～2週は園の雰囲気をつかみ、次に読み聞かせなどの部分実習を行います。中盤で主活動の設定保育に挑戦し、終盤には半日程度の責任実習へ発展させます。このように少しずつ実践を広げることで、無理なく学びを深められます。

Q 04

当園は10日間の実習は全クラスに入る実習内容にしていますが、クラスを固定した方がいいのでしょうか。

A クラスの配置については、全クラスに入った後に固定する場合もあれば、乳児クラス・幼児クラスのそれぞれで固定する場合もあります。いずれの方法にも意義があり、一概に統一することはできません。全クラスを経験することで発達過程を幅広く学ぶことも、固定したクラスでじっくりと学ぶことも、いずれも有効な学びの機会となります。**実習生の学びの目的や課題を踏まえ、適切に判断していくこと**が望まれます。

「実習受入れ」

Q 05

事前打ち合わせに無断欠席し、その後の電話対応の印象も悪い学生がいました。その実習を受け入れることで現場が混乱することが予想されたため、養成校に連絡し、実習受入れをお断りしたのですが、このような対応は正しかったのでしょうか。

A 実習生は未熟であるとはいえ、保育現場に立つ以上、学ぶ姿勢を持つことが求められます。オリエンテーションの際には、その姿勢についても明確に伝えることが必要です。意欲が見られず、不適切な態度が見受けられる場合には、適切な指導を行います。それでも改善が見られない場合には、受入れを継続できないこともやむを得ないと考えられます。
また、**養成校との連携を密にし、情報を共有しながら対応していくことが重要**です。お断りする際には 、「園の体制やこどもへの安全配慮の観点から、今回は見送らせていただく」「学生本人の成長を願っての判断である」といった建設的で冷静な表現にとどめておくことが大切です。また、今後も実習受入れには前向きであることを伝えるとよいです。

Q 06

実習生が主体的、自主的、積極的になれる環境はどうやって作っていけばいいですか。

A 実習の初めは、緊張のために十分に力を発揮できないことも多く見られます。実習生が早く安心して取り組めるよう、受け入れる側の配慮が重要です。そのためには、**職員全員が実習生の名前を覚え、積極的に声をかけるよう心がけること、小さな成功体験を積ませ具体的に認めること、また、毎日の振り返りの時間を確実に設け、実習生と対話する機会を持つことが大切**です。実習生が安心感を得ることで、自分らしさを発揮し、意欲的に学べるようになります。

Q 07

オリエンテーションの手順、確認事項等、オリエンテーションを効果的に実施するポイントを教えてください。

A オリエンテーションは、実習に向けた重要な打ち合わせの機会です。時間や約束事、服装、給食費などの細かな確認事項を明確にしておくことが必要です。同時に、オリエンテーションは単なる事務的な説明の場ではなく、実習生が初めて園に入り、保育の様子や保育士との関わりを通して実習へのイメージを持つ大切な時間でもあります。そのため、**あらかじめ決められた内容や注意事項については、文書としてまとめておくこと**で、当日は保育や園の雰囲気、職員とのコミュニケーションを中心に時間を活用できるようにすると良いでしょう。

Q 08

なかなか実習生が来てくれません。どうすればよいのでしょうか。

A **養成校との関わりを、少しずつ広げていけるといいですね。**園長や主任が外の勉強会や研修などに参加する中で、思いがけないつながりが生まれることもあると思います。また、園内研修に近隣の養成校の先生を講師としてお招きするのも、最初の一歩としてとても有効かもしれません。また、「園の情報が届いていない」か「雰囲気が伝わっていない」ことも考えられますので、SNSやホームページで保育の様子や職員の声を発信したり、受入れ後には、学生の感想や成長のエピソードを共有したりして、「安心して学べる園」として発信することも有効です。

Q 09

**養成校を通じての単位実習はもちろんですが 、自主実習を受け入れたいと思っています。
学生へ自主実習のアプローチの仕方を知りたいです。**

A 自主実習の受入れについては、各園の事情や状況を踏まえた上で、可能な範囲で積極的に受け入れていくことが望まれます。受入れに際しては、所属校への確認、保険の取り扱い、個人情報や健康状態の管理などについて、事前に明確な取り決めを行う必要があります。また、自主実習は評価を伴わないため、記録や振り返りの方法、実習内容などについては柔軟に設定できます。学校での実習では得がたい体験ができるよう工夫することが望まれます。なお、自主実習であっても学生の立場であることを踏まえ、人手として扱ったり、雑務を過度に任せることは適切ではありません。実施にあたっては、養成校に「自主実習も歓迎」と伝えて紹介を依頼する、園のSNSやホームページで募集を発信する方法があります。

「指導の内容・指導の方法」

Q 10

実習日誌の記入に時間を要する実習生が多いように感じます。実習時間内に日誌記入の時間を設けたほうがよいのか、こどもたちとの関わりの時間（学びの時間）を大切にした方が良いのか、悩んでいます。

A こどもとの関わりの時間を最優先としながらも、記録を書く時間を設けることは必要です。記録は体験を整理し、学びを深める大切な過程です。午睡中や活動の合間など、保育に支障のない時間を活用して短時間でも記録に向き合えるよう配慮しましょう。こどもを見て感じることと、記録として振り返ることの両方が、実習の学びを支えます。

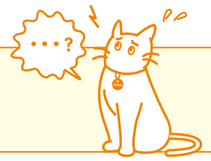
Q 11

実習後の反省会では、本人に対して、できていたことやがんばって挑戦していた姿を評価として伝えていますが、実際に保育士として難しいと感じる実習生については、学校に提出する評価表は厳しい内容となります。このようなやり方で問題ありませんでしょうか。

A 問題ありません。反省会は実習生の努力や成長を認め、次への意欲を引き出す場です。一方、評価表は現状を正確に伝え、学校での今後の指導に生かすための資料です。目的が異なるため内容に差があっても構いませんが、反省会で本人に今後の課題をやわらかく伝えておくとより誠実です。

Q 12

どこまでお願いするべきか、どこまで指導したらいいのかがわかりません。



A 実習生は「学びの途中にいる存在」であり、職員と同じ働きを求める必要はありません。基本的な生活や保育の流れを理解し、こどもと関わる経験を積むことが実習の目的です。まずはできる範囲のことを丁寧に任せ、無理のない範囲で挑戦を促すようにしましょう。安全が確保されている限り、多少の失敗も学びの機会です。「できるようにする」よりも、「気づけるように導く」ことが指導の要です。目安としては、こどもに危険が及ぶ場面や保育の流れを乱す行動にはしっかり指導する（安全・信頼に関わるため）。それ以外の部分は、「どう感じた？」「次はどうしてみたい？」と問いかけ、考える機会を与えることが大切です。

Q 13

時系列、エピソード記録など日誌の書き方もいろいろありますが、養成校での指定がなく園側で提案できる場合、どの書き方をどの期間ですすめることが良いでしょうか。

A 実習の前半は、まず時系列での記録をすすめると良いでしょう。保育の流れやこどもの生活リズムを把握しやすく、観察力を育てる段階に適しています。後半は、印象に残った場面を深めるエピソード記録へ移行します。こども理解や保育者の関わり方を自分なりに考察する力が育ち、学びがより主体的になります。前半は「時系列で“見る力”を育てる」、後半は「エピソードで“考える力”を深める」という流れが、実習生の成長に沿った指導として効果的ではないかと思います。

Q 14

服装や身だしなみをどこまで指導すればよいのか難しいです。

A 実習は「保育者としての基礎を学ぶ場」です。そのため、服装や身だしなみについても、こどもに安心感を与え、安全に配慮した清潔で動きやすい格好を求めることが大切です。派手な髪色やネイル、アクセサリー、香水などは控えるよう指導し、園の職員と同じ基準を基本とします。ただし、実習生を責めるのではなく、「こどもたちがどう感じるか」「安全面から見てどうか」という視点で理由を伝えると、納得を得やすくなります。

Q 15

実習生が複数の場合、どういった実習内容で進めたらいいのかの要点を知りたいです。

A 複数の実習生がいる場合は、同じ内容を一斉に行うよりも、段階的・分担的に学べるように工夫することが大切です。クラスを分けてそれぞれで観察・補助体験で園の流れを理解してもらう、後半は担当児や活動を分けて、それぞれが主体的に関われるようにするなどが考えられるかと思います。一日の振り返りやミーティングは合同で行うと、互いの気づきを共有でき、学びが広がります。

「養成校との連携」

Q 16

園の教育・保育方針と養成校での指導とのズレを感じます。どうすればよいのでしょうか。

A 園と養成校、それぞれに大切にしている視点があります。どちらが正しいかではなく、こどもを真ん中に置いて考えることが何より大切です。園の思いや保育の意図を丁寧に伝え、養成校のねらいにも耳を傾けながら、互いの学びをつなげていけるといいですね。具体的には、実習受入れ前に養成校 側へ園の教育・保育方針を簡潔にまとめた資料を渡し、「この考えをもとに実習を進めています」と伝えましょう。次に、実習終了後の振り返りの場で、「実習生が学んだこと」や「園として感じた課題」を共有すると、互いの理解が深まります。園の方針を“伝える”だけでなく、“共有して対話する”ことが、ズレを埋める一番の方法です。

Q 17

保育記録について、実習生は養成校で習ってきたことを記録しているようですが、私達がおさえて欲しい、学んで欲しい内容と違う部分もあります。学校側にもう少し保育士としての自覚を持った目線を持てるように指導していただきたいと思いますが、これは仕方のないことなのでしょうか。

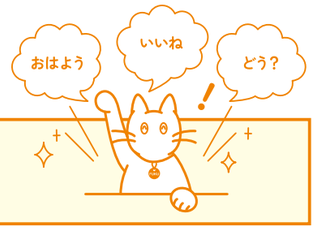
A 養成校での学びは「基礎を育てる段階」、園での実習は「現場の実践を体験し身につけていく段階」です。視点に違いがあるのは当然のことで、その“ずれ”を埋めることこそ実習の学びでもあります。園としては、「こどもをどう見てほしいか」「どんな保育者を目指してほしいか」を具体的に伝えることが大切です。養成校に求めるよりも、園の現場でしか伝えられない“保育の目線”を実習生に手渡す機会として関わっていけると理想的です。

Q 18

現在の学生が養成校でどのような学びをしているのか知りたいです。

A 具体的な学びについては、書籍やインターネット等で 、保育士養成課程への理解を深めていただければと思います。また、養成校のオープンキャンパスへの参加や、養成校教員とのコミュニケーションを通して、学生たちがどのような環境で学んでいるのか、よりリアルな雰囲気を知ることもできます。園としても、養成校の学びを理解し、現場の保育とつなげていく視点を持つことが、実習支援の充実につながります。

「実習生とのコミュニケーション」



Q 19

実習生に対してどのように接すると実習しやすくなるのでしょうか。

A 実習生が安心して学べる環境づくりが何より大切です。まずは、**あいさつやちょっとした声かけで受け入れられている安心感を伝えることから始めましょう**。緊張している実習生には、最初から多くを求めず、「見て、感じて、少しずつやってみよう」と段階を踏んで関われるようにします。また、実習生の気づきや頑張りを見つけたら、その場で具体的に認める言葉をかけることが効果的です。たとえば「こどもに優しく声をかけていたね」「その姿勢、すごく良かったよ」と伝えることで、自信が生まれ、意欲的に学べるようになります。実習がしやすい雰囲気は、特別な支援ではなく、日々の温かなまなざしと小さな言葉がけから育まれます。

Q 20

世代間でギャップを感じます。実習生への接し方のコツはありますか。

A 価値観の違いに目を向けるよりも、「どう感じているのか」「どう考えているのか」を尋ねながら、実習生の思いを引き出すように関わるとスムーズです。また、**具体的な事例を交えて伝えると理解が深まりやすくなります**。
「こうするとこどもたちが安心するよ」など、理由を添えて伝えることで、実習生も納得し、行動に結びつきやすくなります。
ギャップを壁ではなく、お互いを知り合うきっかけと捉え、学び合う関係を意識できるとよいのではないかと思います。
まず否定せず受け止めることが大切です。

Q 21

「実習に失敗＝保育者不適格」と感じる実習生が多いように感じます。受入れ側としては「成長のプロセス」としてとらえてもらいたいと思いますが、実習生への接し方のポイントを教えてください。

A 実習中の失敗は、学びのために欠かせない大切な経験です。実習生が落ち込んでいるときこそ、**失敗は気づくきっかけであること、次につながる大事な一歩であることを言葉で伝えましょう**。うまくいかなかった場面を一緒に振り返りながら、「このとき何を感じた？」「次はどうしてみようか」と問いかけることで、実習生自身の考える力を育てることができます。
また、できている点を必ず一つ伝えることで、実習生が自信を取り戻しやすくなります。
実習を“評価の場”ではなく“育ちの場”として支える姿勢が、実習生にとって忘れられない学びになります。

Q 22

養成校で学ぶ理論と現場の違いを感じる実習生に対して、どのように対応をするのがよろしいでしょうか。

A 実習生が理論と現場の違いに戸惑うのは自然なことです。その違いを否定するのではなく、**「理論は考えるための道具、現場は確かめるための場所」**として伝えると受け入れやすくなります。たとえば「理論は理想の地図のようなもの。実際に歩くと、道の形や風の向きもわかるよ」といった比喩を交えると理解が深まります。
実習生が迷っているときは、「どちらが正しいか」よりも「こどもにとってどうか」を一緒に考える姿勢を見せましょう。
理論と実践をつなぐ体験が、実習生を保育者として一段成長させるきっかけになります。

Q 23

実習生のやる気や主体性があまり見られない場合等、どの程度の声がけをするのがよいのでしょうか。

A 無理に引き出そうとするよりも、まずは安心して過ごせる雰囲気をつくることが大切です。緊張や不安から動けない実習生も多いため、「今日はどんなことに気づいた？」「この場面ではどう感じた？」など、考えるきっかけになる言葉をかけてみましょう。また、できている小さな行動を見つけて具体的に認めることで、実習生は「見てもらえている」と感じ、自発的に動き出しやすくなります。**焦らず、動かすよりも気づかせる声かけを意識すること**がポイントです。

「その他」

Q 24

就職にもつながるように、実習生に園についてもっと知ってもらいたいと思います。何か方法はありますか。

A 園の魅力は、特別な言葉で伝えるよりも、日々の空気の中で感じてもらうことがいちばんです。
職員が笑顔でこどもと向き合い、互いに声をかけ合う姿―そんな日常の中に、園のあたたかさは自然とにじみでます。
少し時間があるときには、会議や行事の準備を見せたり、「この仕事のここが好き」と自分の言葉で話したりしてみてください。
実習の終わりに「また来たい」と思ってもらえたなら、それがいちばんの採用活動です。

Q 25

**保育士のペースに圧倒されて、実習をしている実習生が意欲や自信をそがれてしまう場面があります。
事前に保育士に対して 、「温かい目で」「これから勉強して成長していくところ」などと説明していても、
厳しい目線で見てしまう傾向があるようです。改善策はありますか。**

A **実習指導者同士で「実習の目的は“評価”ではなく“育成”」と共通認識をもつことが大切です**。
新人や実習生を“できない存在”として見るのではなく、“これから育つ芽”として見る視点を共有しましょう。
園内で「見守る」「任せる」「励ます」など関わり方のキーワードを事前に確認しておくと、職員間の温度差を防げます。
実習生の挑戦を温かく受け止める文化づくりが、結果的に園全体の学びにもつながります。

Q 26

自分たちが習得して、あたりまえだと認識している保育の内容と、現在の学生が学んでいる新しい保育内容（性別について等）についてのギャップにはどのようなものがありますか。

A 性・ジェンダー・多様性、インクルーシブ保育・多様性受容、こどもの主体性・自己決定、言葉遣いや表現、評価・記録の視点、アプローチの幅など、時代とともに、こどもを取り巻く考え方も少しずつ変わっています。
今の学生は、そうした多様性を尊重する視点を自然に学んできています。
私たちが大切にしてきた「思いやり」や「一人ひとりを大切にする心」は、今も変わりません。新しい考えを受け入れながら、自分たちの経験と重ねていくことができれば、それはきっと、より豊かな保育につながっていきます。

Q 27

実習生から「クラス担任が園児に感情のままに大声で指示したり、叱責したりしています。周りの保育士も見て見ぬふりをしています。これは虐待ではないですか。」と相談を受けました。どう対応したらいいですか。

A まずは、実習生が感じた違和感や不安を否定せず、丁寧に話を聞くことが大切です。実習生の「気づき」を軽視せず、受け止めます。虐待に当たるかどうかを実習生個人に判断させるのではなく、園長や主任等が中心となり、園として事実関係を確認し、組織的に対応します。実習生には、園が責任をもって対応することを伝え、安心して実習を続けられるよう配慮します。

※保育所職員は、こどもの心身に有害な影響を与える行為を行ってはならず、虐待が疑われる場合には、こどもの立場に立った適切な対応が求められることが、改正児童福祉法において示されています。

保育実習受入れのためのチェックリスト

実習を円滑に進めるためには、実習前の準備から実習中の指導、そして養成校との連携まで、計画的な対応が大切です。このページでは、保育実習受入れの際のチェック項目とポイントを紹介しています。
日々の取組みを確認しながら、実りある実習となるようご活用ください 。

実習前にチェックすること＼check 1／

1 実習受入れ体制を整える

- ☐ 指導担当職員を決めていますか。
- ☐ 直接指導に当たる職員以外の職員も含め、実習の指導方針について話し合い、共有していますか。
- ☐ 指導担当職員が指導方法や評価等について、相談しやすい環境を作っていますか。
- ☐ 指導担当職員は養成校からの実習の依頼内容を確認しましたか。
- ☐ 指導担当職員は実習生の実習段階内容を確認しましたか 。
（初めての実習である保育実習Ⅰ、2回目の実習である保育実習Ⅱ）
- ☐ 直接指導に当たる職員は、実習の段階や内容等の実習依頼の情報を共有しましたか。
- ☐ 全職員（指導を実施する職員以外の者も含む）で実習生の受入れや実習時間について確認しましたか。
- ☐ 実習記録の添削について、職員によって指導内容が変わらないよう、表記の方法や表現を統一していますか。

point

- 丁寧な実習日誌の添削は、実習生の学びを深めるうえで大切な指導の一つです。
しかし、赤字で紙面が埋め尽くされていたり、付箋が大量に貼られていたりすると、実習生が必要以上に落ち込んだり、自信を失ったりすることがあります。

2 事前オリエンテーション

- ☐ 事前の実習オリエンテーションは実施しましたか。
- ☐ 園の保育理念・目標、大切にしていることについて具体的に説明しましたか。
- ☐ 職員構成やクラス編成について説明しましたか。
- ☐ 実習生と共に実習計画について打合せをしましたか。
- ☐ 守秘義務の内容を、実習生がもれなく把握できるよう書面等で伝えましたか。
- ☐ 実習生が事前に準備が必要なこと（ピアノ演奏等）があれば実習生が理解できるよう書面等で伝えましたか。
- ☐ 実習時間や休憩時間の確認を行いましたか。

point

- 可能であれば、オリエンテーションで実習前に保育を見学したり、体験したりする機会をつくり、実習生の不安を軽減し、実習への期待につなげましょう。
- 園として伝えておきたい実習の確認事項・留意事項は 、園の負担軽減、 また、後で実習生が振り返ることができるためにも資料を作成しましょう。

3 ICT活用について

- ☐ 保育記録を電磁媒体で作成したり、ICTを活用したりする場合、仕様について説明しましたか。
- ☐ 養成校と実習施設の間で了解が得られれば、実習生に記入用フォーマットを配信しましたか。

実習中について＼check 2／

- ☐ 実習生に対し、全職員が笑顔で挨拶や声かけはできていますか。
- ☐ 実習生の個性を認め、得意なことや不得意なことを理解するよう努めましたか。
- ☐ こどもたちに実習生を紹介し、子ども達が実習生と遊んでみたくなるよう働きかけましたか。
- ☐ 実習生のその日のねらい（課題や目標）を把握して指導にあたりましたか。
- ☐ 実習生がこどもと自由に関われる雰囲気をつくりましたか。
- ☐ 一日の実習時間や休憩時間は守っていますか。
- ☐ 雑用業務ばかりを任せていませんか。

- ☐ 指導担当職員は、記録することで「保育を可視化」し、学びが得られることを、実習生が理解できるように指導しましたか。
- ☐ 実習施設で導入されている ICTツールがあれば、仕組みを学ぶ機会を提供しましたか。
- ☐ 全職員は、実習生の前で職場の人間関係に関することや仕事の愚痴等は言わないように心がけましたか。

point

- 実習生の不安を軽減し、安心して実習ができる環境をつくることが大切です。
- こどもとの関わり経験が少ない実習生もいます。はじめはどのように関わって良いかわからない場合もあるので、状況を見ながらこどもと関わるきっかけをつくりましょう。

- ☐ 保育（1日、週など）や保育中の行動のねらい・意図を伝え、具体的な指導を行いましたか。
- ☐ 実習生が学びたい内容によって、保育方法を選択できるよう柔軟に対応しましたか。
- ☐ 実習時間内に実習記録を記入する時間を作っていますか。
- ☐ 実習開始後に、設定保育や責任実習の急な実施を促していませんか。

point

- 記録に対して、実習生が自信を持てるように多様な意見を認める、安心感を高めるといった姿勢で対応しましょう。
- 実習日誌の負担を考え、実習時間中に記録をまとめる時間を設けましょう。
- 実習生が自身の気づきを意識化できるような言葉かけを行ってみましょう。

- ☐ 毎日振り返りを実施しましたか。
- ☐ 実習生の課題や気になることは、評価表に記入したり、訪問教員に伝えるだけでなく、日々の振り返り等で直接、反省点や改善のためのアドバイスを実習生に伝えましたか。

point

- 日々の保育を振り返ることを通じて、実習生は、保育士のこどもの理解に触れたり、援助の意図を理解したりする機会になります。日々の保育の振り返りを実習生と共有する時間を積極的につくりましょう。
- 多くの実習生は緊張しているので、すぐに質問を出せなかったり、何を話してよいかわからなかったりすることもよくあります。
  リラックスした雰囲気の中で具体的なエピソードを引き出しながらオープンクエスチョン※1で語りかけましょう。

※1 「はい」「いいえ」で答えられないように、回答者に自由な発言を促す質問形式

養成校との連携について ＼ check 3 ／

- ☐ 訪問指導の際、養成校の教員が実習生と落ち着いて対話ができる環境を作りましたか。
- ☐ 実習生の課題や気になることは、訪問指導の際に、養成校の教員と共有しましたか。

point

- 実習は、施設と養成校が協力して学生を育てる機会です。実習のねらいや評価の視点を共有し、双方の立場を理解しながら進めることが大切です。
- 実習前・実習中・実習後で、養成校との情報共有のタイミングを意識しましょう。
  小さなことでも、早めの連絡が実習生支援につながります。
- 実習後の振り返りや報告を共有することで、次の実習受入れへの改善や、実習生指導の質向上にもつながります。
- 訪問指導では、実習生と教員が話すことで実習生の緊張が和らぎ、実習中に聞けなかった疑問や不安を話しやすくなります。実習生が落ち着いて教員と話せる時間や場を設けることが重要です。

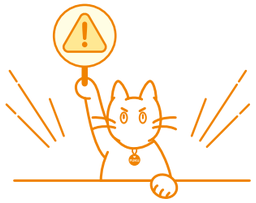
保育の魅力を伝える ＼ check 4 ／

- ☐ こどもの小さな変化に目を向けさせていますか。
- ☐ 失敗を責めず、成長を実感させる声かけをしていますか。
- ☐ 実習生が感じたことを言葉にしてもらっていますか。
- ☐ 保育者の思考を言葉にし、「なぜそうするのか」を伝えていますか。
- ☐ 保育者自身が保育の好きなところや好きな瞬間、こどもの可愛い姿などを語っていますか。

point

- 「保育の楽しさ」と「専門性」の両方を見せることが大切です。
  日常の関わりの中で、保育者がどのようにこどもの姿を読み取り、判断し、支援しているのかを意識して言葉にすると、実習生は保育の奥深さを理解しやすくなります。
- 小さな気づきを共有し、実習生の視点を育てましょう。
  こどもの表情・しぐさ・変化に目を向けるポイントを伝えることで、実習生の「見える景色」が広がり、保育の魅力に気づきやすくなります。
- 園で働く職員の「前向きさ」や「保育の喜び」を発信しましょう。
  保育者自身が仕事のやりがいや好きな瞬間を自然に話したり、小さなエピソードを共有したりすることで、「この仕事っていいな」と実習生が感じられる機会が増えます。

その他 ＼ check 5 ／



- ☐ アルバイトや就職を強要しない等就職トラブルに留意しましたか。
- ☐ 実習生の個人情報やプライバシー保護に十分配慮していますか。
- ☐ ハラスメント防止の視点を共有し、丁寧な言葉遣いを心がける等、園全体で適切な関わりを徹底していますか。
- ☐ 実習生の心の負担に気を配り、無理のない関わり方をしていますか。

実習生に伝えたい保育の魅力

福岡県内の保育士に聞きました！

毎日笑顔がたくさんあふれていること

こどもや保護者との関わりを通して
自分自身も成長できる

こどもの成長を感じられたとき、また、
保護者と一緒に喜びを共有できたとき

こどもたちから元気をもらえるお仕事

何が起こるかわからない
ワクワクドキドキの毎日が過ごせる

参考文献
一般社団法人全国保育士養成協議会
「令和5年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（こども家庭庁）指定保育士養成施設及び
実習先保育所の実習指導担当者に対する効果的な研修の在り方に関する調査研究」
発行　令和6年3月31日 保育実習指導マニュアル 保育所等版 抜粋

「保育士になりたい！」につなげる保育実習受入れガイドブック
2026年1月発行

執筆協力
城　真衣子
（成瀬くりの家保育園 園長）
中島　大樹
（社会福祉法人ヒトトナリ　スーパーバイザー・保育士養成校講師）

発行
福岡県